

問題と向き合う (教育コラム)

「これからの時代は答えの無い問題について、どう向き合うのか？」

このようなコメントをよく聞いたり見たりすることがあると思います。私の性格はよく人から変わってると言われますし、自分でも自覚しています。一方、近頃は外国人の方と話す機会が多く、私の性格は一般的な日本人にありがちな、上記のようなそれらしい表現で物事をうやむやにせず、突き詰めて考える性格のため『個性的だね』と評価されることがあります。個性的な性格は日本では、変わり者と言ったマイナスイメージのレッテルを貼られることが多いと思いますが、私は変わり者 (strange ではなく difference) であることは、個性を失っていないある意味優れた人格だと勝手に思っています (そう自分に言い聞かせて何とか生きています)。この考え方自体、変わっているのかもしれませんが……。そう言った性格ですから、冒頭のそれらしいコメントについても、それって本当なの？ 本当に答えは無いの？ 実は答えはあるんじゃないの？ 考えるのをやめるための言い訳なんじゃないの・・・？と、どんどん性格の悪さが出てしまっているように感じますが、少し難しかったり複雑な問題に直面した際に直ぐに諦めず、突き詰めて考える・考え続ける、周りからは少しめんどく

さい奴と思われてしまうかもしれません。でも、これが私の個性であり、両親からの遺伝もあるのかもしれません。幼少期から学生時代を経て社会人として培われた強みになっているように感じます。ちなみに、T型フォードを開発し自動車を大衆の足としてコモディティ化したアメリカの実業家、ヘンリー・フォードの名言『考えることは最も過酷な仕事だ。だからそれをやろうとする人がこんなにも少ないのだ。』この言葉を励みに日々頑張っています。

と言うことで、唐突ですがご家族の皆さんで一度この問題を考えて見てください。見た目は簡単な計算問題です。 **$6 \div 2 (1 + 2) = ? \dots$** 答えは「1」派と「9」派に分かれてしまいます。詳細な解説は、いつものGoogle (You Tube) 先生で見てくださいと、とっても分かりやすいと思いますので、そちらでご確認ください。そんな中、私がお伝えしたいことはこの問題を見た時に簡単な四則演算なのに、何故2つの答えになってしまうのか？しかもそれぞれの計算には根拠がある。このような問題に対して、どちらもある意味正解であり、それぞれに根拠があるけれど、どちらの考え方も正しいからそれ以上考えなくなり、結果冒頭でお伝えした答えは1つじゃないとか、答えがない問題が世の中にはある、といったような

表現でこの問題の本質を突き詰めようとしなない人は多いのではないでしようか？あるいは、自分の答えのみが正しいと決めつけてそれ以上考えることはせず、自分の意見に固執して相手を攻撃してしまう。他にも『原発は必要 or 不要？投資はリスクがあるがやった方が良く or やらない方が良く？コロナワクチンは打った方が良く or 打たない方が良く？等々』。先程の計算式のような答えが出せるような問題に対してさえ、うやむやにしてしまうことって多いですよ。事実、偉そうに言っている私も日常の些細（？）な問題に対してはいい加減ですし、突き詰めて考えたりはしていません。そんな風に日常の全てのことに対して突き詰めて考えることをしていたら心底疲れてしまいますし、「ぼ〜っと生きてんじゃね〜よー！！」と**チコちゃん**に叱られないような人たちばかりになり、あの番組自体成り立たなくなってしまうと思います。

さて、教育コラムと言うことでもう少し現実的な問題を考えてみたいと思います。子どもが成長しある程度の年齢になると『子どもの将来についてどのように考えるのか？』は親にとってもとても大きな問題になると思います。本来は子ども自身の問題なので、親が関わり過ぎることが100%正解とは言えませんが、とは言え子どもからアドバイスを求められ

たり、日常会話の中で自然と将来の話をするにはあると思います。皆さんはこの問題どのように考えますか？子どもの意見を聞きながら今までの自分の経験も伝え、今何をしてあげれば良いのかなどを考えたりすると思います。ここで大切なことは、将来のことは分からないと決めつけてあまり真剣に考えないことや、ありきたりな進路を選択させてしまうことだったり、親の意見が絶対と言わんばかりのアドバイスもどきだと私は思います。もちろん、将来がどのようになっていくかを明確に予想出来る訳ではないですが、一生懸命諦めずに突き詰めて考えることが大切だと個人的には強く思います。少し振り返って、先程の計算問題の答えが2つになってしまった根本的問題、それは数学的な表現をすると問題の『定義』が曖昧だったからなのだそうです。まずそのことに気付くことがとても大切で、一方の答えに固執して他方を打ち負かすこと（親子の意見の食い違いでどちらも譲らない）に終始してしまう程不毛なことはないと思います。先程の計算問題も定義を正確に決めれば答えは1つになります。つまり、子どもにとって今何が大切で、どのようなサポートを親はすべきかを考える時に、計算式のようにスムーズには中々行きませんが、まず子どもは何を考え、何を望んでいるのか？親から見た我が子の特性はどう見えているのか？それを活かすならどういう選択肢があるのか？等の前提条件=定義

を親子で明確にしてから問題に向き合っていくことだと思います。決して「夢を持ちなさい」「夢を持つことは大事なことだ」に代表されるような、いかにも人生の先輩ぶったありきたりな言葉を連呼し、子どもに具体的な職業（医者や先生、バスの運転手さん・・・等々）を名言させて勝手に親が安心しているようでは、問題に向き合っているとは言えないと思います。少し強い表現になっていますが、学生時代から今もなお変わり者の私には、ずっと違和感を感じている問題の1つで、子どもと将来のことを話し合う機会が増えてきた昨今、私自身真剣に向き合っている真っ只中なのです。

最後に、将棋界で全7タイトルを独占した現役でありながら既に伝説の羽生善治棋士の過去のインタビュー発言を共有したいと思います。「三手先を読む」、最初の一手を自分が指し、その手に対して相手が二手目を指し返す。さらにその手に対して、自分が三手目を指す。一見簡単そうに見えるこのシミュレーション、実は非常に難しいそうです。何故なら二手目は相手が指すからです。この二手目を読み間違えると、その先何十、何百先を読んだとしても、全く自分の思い通りにはならないからです。ここで大事な二手目を読むために大切なことは、相手の立場に立つこと。この相手の立場に立つことが前提条件=定義です。しかし、これが非常に難し

いことで、自分が相手だったらどう指すかと考えているようで、実は自分
だったらどう指すかと考えてしまっていることが多く、結果として相手か
らの二手目が予想外な手になってしまう。つまり、自分と相手では発想の
違いがあり、完全に自分の思い通りにはならないということをもまず認識す
ること。そして、そこで『答えはない、分からない、考えてもしょうがな
い。』と諦めてしまうのではなく、相手の考えていることを一生懸命想像
し、推測し、推察することと過去の経験を参考にすることで、最適解を見
つけることができるのではないのでしょうか。とすることで、考えることは
とっても骨の折れる作業ですが、皆さんにとって大切なことはとことん考
えて問題と向き合ってみてはいかががでしょう。とは言え年末年始は、チコ
ちゃんや家族から怒られない程度に、ぼ〜っと過ごしたいものですね。

ソニー生命保険(株) 大分支社

〒 870-0029 大分市高砂町 2-50

オアシスひろば 21 9 階

TEL 097-532-9200

ライフプランナー 山田新悟